

令和5年6月15日

令和4年度 特別の教育課程の実施状況等について

岐阜県		
学校名	管理機関名	設置者の別
恵那市立三郷小学校	恵那市教育委員会	公立

1. 学校における特別の教育課程の編成の方針等に関する情報

学校名	特別の教育課程の編成の方針等の 公表 URL
恵那市立三郷小学校	http://www.ena-gif.ed.jp/misato-e/cat2/http%3Awww.ena-gif.ed.jp/misato-ecat2/

※必要に応じて行を追加すること。

2. 学校における自己評価・学校関係者評価の結果公表に関する情報

学校名	自己評価結果の公表 URL	学校関係者評価結果の公表 URL
恵那市立三郷小学校	http://www.ena-gif.ed.jp/misato-e/cat2/http%3Awww.ena-gif.ed.jp/misato-ecat2/	http://www.ena-gif.ed.jp/misato-e/cat2/http%3Awww.ena-gif.ed.jp/misato-ecat2/

※必要に応じて行を追加すること。

3. 特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

(1) 特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

- 計画通り実施できている
- 一部、計画通り実施できていない
- ほとんど計画通り実施できていない

(2) 実施状況に関する特記事項

※(1)で「一部、計画通り実施できていない」又は「ほとんど計画通り実施できていない」を選択した場合は、必ず記載する。

(3) 保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

- 実施している

- ・実施していない

<特記事項>

ア 外国語活動の学習に関わる学習活動の情報提供

- ・保護者には、授業参観で外国語活動の授業や発表を行い、学習を参観する機会を設けた。学校運営協議会の委員やこども園の保育教諭にも参観を働きかけた。
また、通信やHPにおいて、学習の様子を伝えた。

イ 外国語に関わる個々の児童の所見の作成

- ・「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」「外国語への慣れ親しみ」「言語や文化に関する気付き」について学習状況をとらえ、通知表や懇談で、保護者に知らせた。

3. 実施の効果及び課題

(1) 特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している目標との関係

当該校は、学校教育目標を「豊かな心でやりぬく子」とし、ふるさと三郷・恵那を愛し、生き生きと学習して、将来、社会に出てたくましく活躍する人の育成を目指している。外国語の学習では、下記の3つを願う児童の姿とし、自分の伝えたいことを考えながら話すことができる児童の育成を行ってきた。

- ◇仲間とのコミュニケーション活動を通して、自分の思いを深め、いろいろな表現や語彙を駆使して相手に伝えようとするたくましさのある児童。
- ◇自他の良さや共に学び合うよさを実感し、互いに高めあえる児童。
- ◇相手意識や目的意識を大切にし、目的や場面、状況に応じて自分で臨機応変に考えながらコミュニケーションを図ることができる児童。

ア 効果

小学校低学年から、全学年を通して系統的に学習を実施することにより、小学校における外国語教育の一層の充実が図られた。低学年のうちから、児童が相手に伝えるために、英語でどのように表現するとよいか悩む場面や活動を設定することで、「考えながら話す」基礎的な姿勢を生み出すことができた。また、驚きや発見のある伝え合う活動を設定することで、その必然を実感し、積極的なコミュニケーションを図ることができた。このこと、学年が上がり、扱う英会話文や英単語が増えても、楽しく意欲的に学習を行う姿につながっている。

イ 課題

題材の設定は、指導計画に沿って実施されたが、学習内容は、第3、4学年の外国語活動の内容と似通ってくる傾向がある。また、5、6年生の英語の学習、3、4年生の外国語活動の学習が、教科書に準じて行われるようになり、学習で扱う言語材料が、発達段階に応じて適切に選択されているか、再度、検討が必要となっている。

Classroom English を使い、学習を進める授業づくりや、課題化までの Teachers' Talk の工夫など、低学年に合った英語での指示や説明に関して課題として挙がっている。

「三郷メソッド」にある「授業のブロック化」は、効果的な学習展開を選択して実施した。

(2) 学校教育法等に示す学校教育の目標との関係

ア 効果

既習内容だけでなく、英会話に必要なコミュニケーションの仕方も身に付いており、学習の中で生かせる児童が多くいる。会話で困ったとき、自分から進んで分からないことを伝え、コミュニケーションを図り、理解しようと努力することができる。

授業の導入で、英語の歌に慣れ親しみ、英語表現を獲得し、Teacher's Talk から伝え合う内容を大まかにとらえる活動を位置付けることによって、よく聞いて相手の話すことを理解しようとする力が高まり、それらを使って相手に伝わる英語で話そうと考えながら話すようになってきた。

保護者は、1年生からの系統的な学習はよいと考えており、学校の教育課程や教育活動に理解があり、児童の支援をしていただいた。

イ 課題

学習活動を楽しみ意欲的に活動する姿がある一方で、学年が上がるにつれて、英語でどのように表現したらよいかわからず、正しく話す自信がなく意欲が低下していく傾向にある。慣れ親しむ外国語活動の段階から、語彙等の定着を見通した指導の手立てを考えていく必要がある。

また、評価項目を学校全体で統一して行う学習に関する個人評価は、第1学年には難しいため、評価の観点を整理しながら、どのように進めていくか検討中である。

4. 課題の改善のための取組の方向性

(1) 第1・2学年の年間指導計画および単元指導計画

新学習指導要領の外国語活動の目標に沿い、中・高学年への系統性を考えた言語材料を再考する。無理のないよう、学齢や環境に合わせた英単語、会話を設定して語彙を増やし、楽しく英語に慣れ親しむことのできる外国語活動を実践する。

また、各単元において前時の既習内容をふまえたステップを意識して指導し、語彙等の習得に向けた英語表現の蓄積を図るようにする。

(2) 授業展開の工夫

教師が低学年に合った英語での指示や説明を意識して授業づくりを行う。Classroom English を使い学習を進め、課題化までの Teachers' Talk の効果的な提示を考え、実践

する。

外国語活動、外国語科の土台として、素地となる資質や能力を培うために、基本の授業展開は生かしながら、内容にあった効果的な方法を探っていく。

(3) 評価の在り方

各学年の学習目標を再度、具体化し、児童や学習に沿い、活用できるものを再考する。

(4) 児童の実態に即した全校体制での授業づくり

低学年で行った英語でのコミュニケーション活動への興味、関心、意欲、及び、技能が、上学年で生かされる学習活動の工夫や、活動的であった児童が苦手意識から意欲低下にならないように支援の手立てを考え、全校体制で実践をしていく。